

◆連載-Vol.17

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948 神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、「住宅特集」「新建築」編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年～2014年千葉大学客員教授。木の建築フォーラム理事、日本建築学会建築文化事業委員会幹事

戦後の始まり

丹下健三と白井晟一の「伝統論争」が起こったとは言うものの、実際にはそれぞれが雑誌に寄稿して所感を述べたのであって、明治時代のように同じ場で意見を戦わせたわけではなかったから論争と呼べるようなものではなかった。

ところが、これが論争と呼ばれるようになったのは、このふたつの論文がきっかけとなって、当時の若手建築家たちに論争の火種を振りまいたためであった。その背景には時代的な雰囲気があったのだろう。終戦とともに社会の体制は一変し、誰もが新しい世界を夢見、進むべき方向性を探っていたのだから。

そこで、この時代の状況を振り返ってみよう。

吉阪隆正がコルビュジエのもとから帰ってきて、「自邸」(1955)、「ヴェネチアヴィエンナーレ日本館」、「ヴィラ・クウ・クウ」などを毎年続けて発表した。

吉阪の日本建築界での位置付けはなかなか難しい。モダンかというそうは言い切れず、かといってアンチモダンでもなく、ましてや伝統至上主義でもない。どこかに土着性を感じさせる造形であり、その意味では縄文に通じるニュアンスを持っているように思われるが、あえて言えば風土主義とも言えようか。そうするとその後に続く多くの建築家たちの系譜をまとめることができそうだが、それはまたあとで話すことにする。

一方で、篠原一男は1954年に「久我山の家」、1958年に「谷川さんの家」を発表し、1961年に「から傘の家」「大屋根の家」などを発表するが、当初は和モダン風の住宅だと思われていた。ところが1966年の「白の家」あたりから空間に抽象性が際立ってくる。

増沢洵や池辺陽などが社会派的な立場から最小限住宅に取り組んでいるにもかかわらず、「大きいことはいいことだ」と言わんばかりに自由に住宅を設計していた篠原が、抽象的な芸術的な空間へと向かうのである。

現代においても住宅空間の抽象化は特殊解なのだが、篠原作品は若手の建築家たちに大きな影響力を及ぼしていく。住みやすく快適で経済的な小住宅に対して、異なった住宅設計のアプローチがこのころから始まったのである。

持家政策と木材需要で林業が激変

1960年代になって戦後の貧乏暮しから高度成長期を迎えたが、その背後には朝鮮動乱による特需景気が幸いしている。

その詳細についてここで触れる誌幅はないが、経済成長によって国民の所得は増加し、それまでは居住環境としては決して満足のいくものではない長屋や木賃アパートに住まざるを得なかった人々が戸建ての庭付き住宅を求めるようになった。

国は所得倍増政策、続いて持ち家政策をとり始めた。ところが戦争で乱伐した山には十分な木が育っていなかったため、やむを得ず木材の輸入化に踏み切ったのが1964年のことであった。併せて森林組合の統合を進め、林業の集約化と大規模化を進めたのは、いずれ迎えるべき大量生産・大量消費、という構造を見越してのことであったのだろう。しかし、農地解放のように林地は解放しなかった。

住宅の需要は高まり、資材は不足していたゆえに木材価格は跳ね上がり、残り少なかった森林資源は貴重な財産となった。輸入自由化と言っても為替相場は1ドル360円の固定相場だから、木材の市場価格は安いものではなく、林業家は大いに潤った。

いつの世にも目ざとい人はいるもので、山林が儲かるならばと言って林業に投資する人たちも増えた。それが戦後の拡大造林と呼ばれる現象である。植林には国の補助があったため、伐採後の山だけではなく、里山や畑にまでスギやヒノキ、ところによってはカラマツなどが植林された。

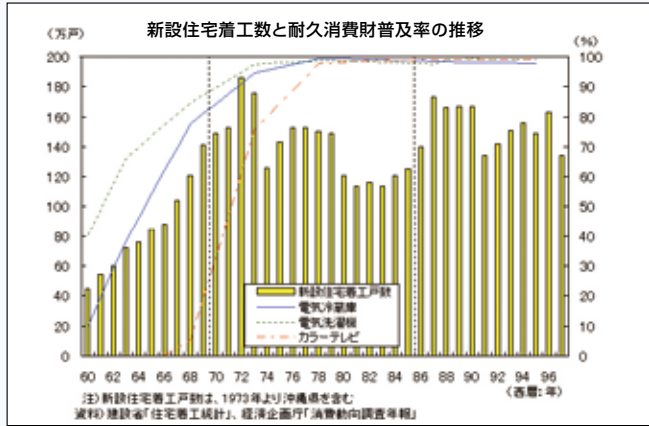
このころは燃料革命と呼ばれた時期でもある。それまでの一般家庭の燃料と言えば炭や薪が主であったが、石油、ガス、電気が広く使われるようになり、薪炭の供給元であった里山が無用のものになり始めていた。

萌えるような若葉、森とした深い緑、色とりどりの紅葉、寒風に晒される枯れ枝など、四季折々に変化する日本の風景が、年がら年中緑一色に染められてしまい、童謡「里の秋」が描く風情など都市近郊では見られなくなった。(今やこの歌を知っている世代がどれだけいるのだろうか。嗚呼)

その後、経済はさらに発展してドル相場はどんどん下がり、それに比例して輸入材も安くなった。いまや山には木材資源が有り余っているというのに、我が国の木材自給率はどんどんと下降し、一時期は20%を割っていたが、現在ではなんとか30%まで持ち直したようだ。

こんな状況だから、投機で里山に植林したにわか林業家たちはもう振り向きもしやしない。世代交代などもあり、いまや山林の所有者を確定することも難しい状況となっていて、現在の山の荒廃と結びついている。

この拡大造林は第一次オイルショックあたりまで続いたが、



1972年には180万戸を超えたが翌年のオイルショックによっていったんは低減、その後さまざまな社会状況に対応して増減を繰り返し、ここ数年は70万戸前後で推移していたが、昨年度の統計では約92万戸となっている。面白いのは住宅の着工戸数の増加と電気洗濯機、電気冷蔵庫、カラーテレビの普及率が同期していることだが、家電製品はその後100%近くで落ち着いているようだ。(建設省、経済企画庁の資料より)



1966年から2012年までの森林面積の推移である。全体の面積はほとんど変化がなく、1986年にかけてわずかに天然林が減少し、その分人工林が増加しているが、その後は変化がない。1960年代後半から拡大造林が始まっているのに森林面積が増えていないのは、里山が森林となる一方で都市部に近い山林までもが、多摩ニュータウンのような大規模宅地開発で減少したからではなからうか。(林野庁の資料より)



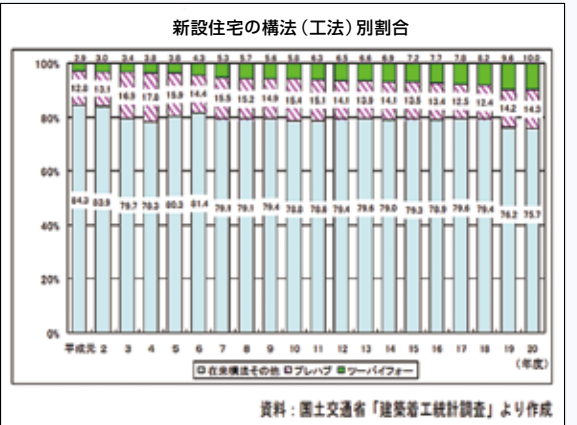
天然林も増加しているが、人工林の増加率のほうが上回っている。これは、天然林が高齢木が多く成長が緩やかなため、人工林は育ち盛りの木であったからであろう。すでに蓄積量は50億立方メートルだという説もある。(林野庁の資料より)



釣鐘型の林齢別蓄積量が平行移動している。日本の国民同様、森林も高齢化しているのだ。いちばん高いあたりで全体の約80%以上を占めており、これが現在樹齢60年生前後となって、まさに伐期を迎えている。(林野庁の資料より)



1964年(昭和39年)に木材の輸入が自由化されると、それまで100%近かった自給率が加速度的に減少し、一時期は18%まで落ち込んだ。2010年に国土交通省は公共建築の木造・木質化を打ち出し、林野庁は2020年までに自給率を50%以上に上げると言い出した。そのおかげが昨年度では30%を超えている。(林野庁の資料より)



新設住宅の構法別割合 1989年(平成元年)から20年間の統計である。この間、18%弱の年もあるが、平均しても14%前後を行ったり来たりしている。その代わりに目を引くのがツーバイフォーである。着実に増加しているのがわかる。(国土交通省の資料より)

それ以降は育林に手いっぱい植林にまで手が回らず、その状況は林野庁が発表した統計に如実に表れている。

話を元に戻そう。拡大造林が始まった時期にプレハブ住宅が登場。もともとは南極基地のために開発されたものだったが、それが住宅を市場として登場したのだ。木造不足を反映してか、鉄骨系が主であった。

さて、常々疑問なのだが、いったいプレハブ住宅の価格はどのようにして決められたのだろうか。誰かご存知の方がいたら教えてほしい。以下は私の邪推である。

もともとモデルにすべき住宅がなかった。戦後まで都会部では賃貸の長屋や木造アパート(かぐや姫の「神田川」の背景である)、農村部ではまだ「結」が残っていて、自分の家を出金を出して建てるという習慣はなかった。建てられたのは、ほんの一部のお金持ちでしかなかった。

岐阜県高山市に「吉島家住宅」がある。当主の七代目吉島休兵衛忠男に聞いた話だが、建て替えるときには必要量の原木を買い入れ、それを次の建て替えまで放置して自然乾燥しておくという。もともと蔵元で多くの使用人を抱えていたから、手入れも十分に行き届いていただろう。200～300年は

ゆうにもったに違いない。もちろん費用もかかっただろうが、仮に200年もったとしたら、その間およそ6世代から8世代の経済的蓄積ができるのだからこそ可能な話である。

これではプレハブ住宅のモデルとしては高価すぎる。かといって壁に釘を打ったら隣に突き抜けたなどという安普請の長屋など論外。となると、サラリーマンの一生賃金から算出したに違いない。そのためにサラリーマンはディベロッパやプレハブメーカー、銀行のために一生を捧げることになった。これが私の邪推である。

面白いことに、ここ10数年の新規住宅着工件数の統計を見ると、着工件数の多少にかかわらずプレハブ住宅のシェアは14%前後を行ったり来たりしている。テレビや新聞など、あらゆる媒体を駆使してあれだけコマーシャルをしても。

日本は戦後の貧困から経済成長へと大きく社会状況が変化した。さらに体制の変化は様々な面で「自由」をもたらした。

そのような中で公共の建物、民間の建物、住宅、その背後にある木材供給基地としての山林や林業、そして社会。どれをとっても揺籃期であったが、同時に新しい社会へ向けてポテンシャルが高まっていった時代でもあった。(続く)